

Title	包世臣の『書譜』刪定
Author(s)	岸田, 知子
Citation	中国研究集刊. 1986, 3, p. 32-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60826
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

包世臣の『書譜』刪定

岸田知子

包世臣の『芸舟双楫』所収の「論書」中には、『書譜』に触れたり論評したりするものがいくつも見受けられ、彼が孫過庭の『書譜』を書作品として、また書論として、熱心に研究していたことがうかがえる。その彼の『書譜』研究のうち、特筆すべきものとして『書譜』刪定が挙げられる。

『芸舟双楫』所収の「自跋艸書答十二問」によると、道光十二年（一八三二）、包世臣は『書譜』の法帖を友人から借りて臨書するうちに刪定をしたいと思うようになり、揚州に帰ってから刪本を作製したとある。

友人従り仮りて書譜を得、各おの教行を臨写し以て之に応ず。其の文の蕪穢多きを以て、略ぼ刪截を為す。邗に返り、乃ち刪本を写出し、子弟に授け誦習せしむ。

この時の刪本が『小倦遊閣艸書』に刻入され、包世臣は自ら跋文を書いた。道光十二年閏十一月三十日のことである。この跋文が「自跋刪擬書譜」と題して『芸舟双楫』に著録されている。

その中で包世臣は『書譜』の刪本を精写して門人に伝示する旨を述べている。

写し竟わり、修存・熙載・蘊生・震伯に伝示す。当に共に此の秘密を諭すべし。道光壬辰閏月晦日。

包世臣の『書譜』刪定はその後も試られた。それが一応の完了を見たのが、咸豐元年（一八四九）再刊の『安吳四種』に収録された、道光二十八年（一八四八）の付記のある「刪定吳郡書譜序」である。西川寧氏は「刪擬」から「刪定」への変化が、これを完成とする包世臣の意図を物語ると指摘している（「包慎伯の小倦遊閣艸書について」『書苑』一卷一号所収）。この道光二十八年刪定本は、道光十二年の刪本に比べて大幅に削除部分が増えている。西川寧氏が以上の経緯と両書の対照を發表したのは昭和十二年であった（同）。

その後、伏見沖敬氏がその対照表を再録し、道光二十八年以後の刪定例を紹介した（「包世臣刪定書譜」『書品』二〇三号・

『中国書道の新研究』)。包世臣は道光二十八年には七十四歳になつていた。さらに四年後の咸豊二年(一八五二)、楊以増に送つた「刪定孫呉郡書譜叙」は道光二十八年本に依つてゐるが、なお多少の異同が見られる。翌年、七十九歳に至つても刪定書譜を臨書しているが、一部削除箇所を戻している。このように、包世臣は最晩年に至るまで、『書譜』刪定になみなみならぬ執着を示しているのである。

ところで、刪定本そのものの内容については、近年、高畑常信氏が削除箇所すべてを提示して、それぞれの削除の意図を論じた(「芸舟双楫の書論(二) 書譜研究と書論の新展開」『書論』十三号所収)はかには詳論を見ない。気づいた点をいくつかここに述べようと思う。

『書論』の構成については諸説がある。『書譜』の末尾で孫過庭自身が「今、撰して六篇と為し、分かちて両巻と成す」と書いているのに、現存の『書譜』は冒頭に「書譜巻上」とあるだけで、巻下の標題は書中に見られず、六篇に分かれていないこと、また、『宣和書譜』が「書譜序上下」と著録していることから、現存するのは序文であつて本文は亡失したとする説、巻上のみ残つて下は失われたとする説などが行なわれている。朱建新『書譜評考』は、現行本の全文が本来は六篇から成り、それが上下に分かれていたとして、福永光司氏もこれを支持している(『中国文明選』十四芸術論集)。(福永氏は清の朱履貞の『書学捷要』に基づいた朱建新の六篇分割に倣つてゐる

が、この稿では便宜的にその篇立てに従うことにする。)

包世臣は現行『書譜』を本文を亡逸した序文と見た。

六篇の譜、南宋に亡ぶ。今伝わる者は止だ其の叙説のみ。

(「自跋刪擬書譜」)

そして亡くなつた六篇の目は、執・使・転・用・擬・察であろうと推察している。包世臣が現行『書譜』を序文と見たことが、彼の刪定作業の基本となつた。序文ならばこそ、本来簡潔であるべき文章に混入した「浮言」を刪去し、繁雑な文言を整理すべきであると考えたのであろう。

では、その刪去の基準はいかなるものであつたか。『書譜』と道光二十八年の「刪定呉郡書譜序」を見比べると、次の四点にまとめられる。まず第一に、同一内容の言い換えである部分は削る。古典の言辞による言い換えは当然不要である。第二に、例話は削除する。第三に、事実としての信憑性のない記事は削る。第四に、その他、本旨を述べるのに不要と包世臣が考えた箇所を削除する、である。第一第二の点は、およそどんな著作のダイジェスト版を作る場合にも当てはまる作業であろう。原文の持つ格調や風合は失われてしまうが。第三点は、原文に「浮言」が混入しているとする包世臣の見解に基づいた基準である。第四点には、包世臣の『書譜』観が、反映されていることとなる。

削除箇所の最も多い第一篇は次のように刪定されている。(以下「」内が削除部分。)

夫れ古自りの書を善くする者、漢魏に鍾張の絶有り、晋末に二王の妙称せらる。「A」評者云う、彼の四賢は古今の特絶にして、今は古に逮ばず。古は質にして今は妍なり。夫れ質は代を以て興り、妍は俗に因つて易わる。「B」馳騫沿革、物理常に然り。能く古にして時に乖かず、今にして弊を同じくせざることを貴ぶ。「C」

「A」は一〇三字、「B」は一八字、「C」は三一九字にもなる。

「A」は、次の通りである。

「王羲之云う、「頃ろ諸名書を尋ぬるに、鍾張は信に絶倫爲り。其の余は觀るに足らず」と。謂うべし、鍾張云に没して、羲献之に繼ぐと。又云う、「吾が書之を鍾張に比すれば、鍾當に抗行すべし。或いは謂えらく之に過ぐと。張が草には猶お當に雁行すべし。然れども張は精熟にして、池水尽く墨となる。假令寡人之に耽ること此くの若くんば、未だ必ずしも之に謝じず」と。此れ乃ち張を推して鍾に邁るの意なり。其の專擅を考うるに、今だ前規に果せずと雖も拾いて以て兼ね通ず。故に即時に懸する無し。」

王羲之の言は、前者が虞和『論書表』（但し「不足觀」は「不足存」に作る）に依るが、同内容の言が王羲之の『自論書』に見える。後者は同二書のほか『晋書』王羲之の伝にも見える。こゝは、第一段冒頭文を受けて、鍾・張・二王が古今に傑出した存在であることを強調した上で、王羲之の言を借りて、張芝を鍾繇より上に置き、羲之が彼らに拮抗しうることを認めている。

そして、一つの書体を取り上げると羲之は鍾・張に劣るが、「兼通」という点から見ると決して劣らないという。この「兼通」という概念は、この後いくたびか登場するが、包世臣は削除することが多い。要するに、ここでは王羲之のことばとその延長上の鍾・張・羲の優劣論を削除したことになる。道光十二年の刪本では「A」の全文が残されている。

この優劣論は、「C」では王献之を含めて展開されている。

「又云う、「子敬の逸少に及ばざるは、猶お逸少の鍾張に及ばざるがごとし」と。意うに以為えらく、其の綱紀を評し得て、而も未だ其の始卒を詳かにせざるなり。且つ元常は専ら隸書に工にして、伯英は尤も草体に精なり、彼の二美は、逸少之を兼ね。草に擬せば則ち真を余し、真に比せば則ち草に長ず。専工は小劣なれど、博涉には多く優る。其の始終を總ぶれば、乖互無きに匪ず。」

すなわち、梁武帝「觀鍾繇書法十二意」に基づいて、鍾・張・王羲之・王献之の順で優劣を断するのは、大筋の評としては合っているが、事実としてはもう少し微妙である。鍾元常の隸書、張伯英の草書と王羲之のそれを比べると、確かに王羲之は劣るが、王羲之は各書体に通じているから、総合すると先の順は正しくないことになるという。こゝは「A」と同じ論の展開が見られる。

続いて、謝安が献之を軽視したこと、献之が自ら羲之に勝っていること述べたことを挙げ、献之の態度を子にまじきこと

と厳しく批判している。

「謝安素より尺牘を善くす。而して子敬の書を軽んず。子敬嘗て佳書を作りて之に与う。謂えらく必ず存録せんと。安輒ち後に題して之に答う。甚だ恨みに以為えり。安嘗て敬に問う、「柳の書は右軍に何如」と。答えて云う、「故より当に勝るべし」と。安云う、「物論は殊に爾らず」と。子敬又答う、「時人那んぞ知るを得んや」と。敬権に此の辞を以て、安の鑿る所を折くと雖も、自ら父に勝ると称するは、亦た過ならずや。且つ身を立て名を揚ぐるは、事 尊頭に資る。勝母の里には、曾参入らず。」

また、羲之の書を消して書いた猷之の書を、羲之に、酔った時の書だと言われたという逸話を引いて、王羲之の優勢を証している。

「後に羲之 都に往く。行くに臨んで壁に題す。子敬 密に之を拭除し、輒ち書して其の処に易え、私かに悪からずと為す。羲之還りて見、乃ち歎じて曰く、「吾が去りし時、真に大酔せしならん」と。敬乃ち内に慙づ。是れ逸少の鍾張に比すれば、則ち專博 斯に別あり。子敬の逸少に及ばざること、疑い或ること無し。」

以上、四人の優劣を述べる文をすべて削っているため、刪定本では、四賢は同等の扱いとなっている。高畑論文では、猷之の顕彰のための措置であるとするが、果たしてそうであろうか。確かに、猷之の人間性に対する厳しい批判は意識して避けたと

言えなくもない。しかし、書における劣勢をここで削除することには、別の意図が考えられる。というのは、第五篇では、王羲之より後の書人は、猷之を含めて、技術ばかりか心情の面でも遙かに王羲之に劣っていると述べていて、この箇所は削除されていなければならない。

是を以て右軍の書、末年多妙なるは、当に思慮通審し、志氣和平にして、激せず厲せず、而して風規自ら速きに録るべし。子敬已下、鼓舞して力を為し、標置して体を成さざるは莫し。豈に独り工用の倅（せう）からざるのみならんや。亦た乃ち神情の懸隔する「者なり」。

なぜ、猷之劣勢が第一篇では削られたか。

包世臣は「書譜弁誤」で、王猷之が羲之の書を書き直したという話は、当時の猷之の年齢から見て無理であると論証している。また、謝安が猷之の書を送り返したという故事も事実ではありえないと論じ、この二説は「自ら出づる所を知らず、大約俗伝にして事実に非らず」と言う。

一方、孫過庭は、自分の目で見ただけにしか事実を認めないという態度を明らかにしている。

「優劣紛紜として、殆んど覈（かく）繆（む）し難し。」其の当代に顕聞し、遺迹の見存する有るは、抑揚を挨（あ）つ無くして、自ら先後を標す。（第三篇）

また六朝期の書論書評はすべて信頼に足るものではないとも述べている。

諸家の勢評に至っては、多く浮華に涉り、外に其の形を状すれども内に其の理に迷わざる莫し。(第二篇)

こうした孫過庭の態度と照らし合わせると、『論書表』などの引用に基づく鍾・張・羲之の優劣論、事実とは認められない猷之の逸話やそれについての論評は、後から混入した「浮言」に違いないと包世臣は考えたのだから。この猷之説話の引用は、道光十二年本でも削除されていて、『書譜』刪定の動機を喚起した箇所ではなかったかと思われる。だからこそ、第五篇の孫過庭が自分の判断で優劣を論じた部分は当然残すことにしたのであろう。

古典からの引用や、例言を極力排除し、繰り返しを避ける包世臣が、最終章の第六篇になると、刪定の刃が急に鈍ったかのように、それらを多く残している。第六篇の冒頭、『易』を引用して、書は身近な体験に立脚するもので、たとえ技術がなくても感情の発露が書に表われると述べるくだりは削除されているが、続く、一点一画さえそれぞれ異なった形をしているのだから、その集合体である文章は個性の発現である、心手が一体となれば一家をなすことができるのであって、古人の書法に法るだけが書の道ではないと言う箇所は(途中八字が削られてはいるが)残されている。その中の「譬夫絳樹青琴」で始まる三十六字は、故事に拠って同じ内容を繰り返して、これまでの基準でいえば当然削るべきであらう。

「譬えは夫の絳樹青琴、姿を殊にして艶を共にし、随珠和璧、

質を異にして妍を同じうするがごとし。何ぞ必ず鶴を刻し龍を図き、竟に真体に慙じ、魚を得て兔を獲え、猶お筌蹄を慙まんや。」

次の「聞く、夫れ家に南威の容有りて、乃ち淑媛を論すべく、龍泉の利有りて、然る後に断割を議すべし」とも、その後にくく内容を例を用いて呈している箇所、削除してよい箇所である。

この辺りから、書の真価を見極めることのむずかしさを述べ、論は真価を認められない者の嘆きにまで及ぶ。その説明の中で、蔡邕や王良・伯業の譬え、さらに『論書表』に見える王羲之の故事を取り上げた箇所も残している。

老嫗題扇に遇い、始め怨みて後には請い、門生書机を獲て、父削りて子懐るが若きに至っては、知ると知らざるとなり。また、典拠のあることばで繰り返し説明する所も削除していない。

莊子曰わく、「朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らず」と。老子云う、「下土 道を聞きて大いに之を笑う。之を笑わざれば、則ち以て道と為すに足らざるなり」と。

このように、これまでの段では削除対象となったであろう記述を削除せずに、繰り返したたみこむように語るのは、真の価値を見極めることがいかにむずかしいか、ということである。そして、無知な者が価値を知らずにいることもやむをえないと、いわば諦めに似た嘆きをもらしている。簡略化された刪定本全

体から眺めた時、この第六篇は際だって饒舌に見える。包世臣のひとかたならぬ思い入れを感じるのである。

包世臣は早くから軍事や経済方面の研究で知られ、五十一歳で運河や水上運送についてまとめた『中衢一勺』を発表し、また幕友として多くの將軍に重んぜられた。しかし三十三歳で拳人となったものの、以後の試験に落ち続け、進士にはついにならず、官界に入ることはできなかった。一方で書における名声も得てはいたが、正規のエリートコースからはずれているという意識が、生涯離れなかったのではないか。自分を認めてくれる蔡邕や伯樂はいなかった。自分の回りには、王羲之の書と知らずに題扇を怨む老婆や机を削る父親のような者ばかりであった。それもしかたのないことではあるが、と一字一句がわが胸中を語るように思えたであろう。それ故に削除しなかったのではないだろうか。晩年には、清末の動乱を憂慮して進言した経世策は取り上げられず、失意の日々を送ることになった。包世臣は最晩年にいたるまで、いくども『書譜』を臨書しているが、その書面が彼の心情に應えるように思えたにちがいない。

書の本質を論ずるとき、孫過庭は心手一体を強調する。うまく書ける五つの条件（「五合」）として「神怡務閑」「感惠徇知」「時和氣潤」「紙墨相筭」「偶然欲書」を挙げるが、精神的な要素を重視しているのがわかる。これに対する「五乖」では、「心遽体留」「意違勢屈」「情急手闌」と、心と手が不調であれば書けないことをより一層明らかにしている。時より器、

器より志を得ることが重要とも言う。五合が揃ったとき心情はそのまます手に、そして書となって作品に表われるのである。

五合交ごも臻れば、神融け筆暢ぶ。（第二篇）

心と手を二元的要素と見るのは、趙彦の『非草書』に始る伝統的な視点であるが、孫過庭は、王羲之の書こそ心手一体を具現したものであるという。

信に智巧兼ね優れ、心手双つながら暢ぶと謂うべし。（第二篇）

孫過庭は、王羲之の書作品を具体的に挙げて、それぞれを書いたときの心情を推察している。

楽毅の写せしときは、則ち情多く佛鬱たり。画讚を書せしときは、則ち意奇に渉る。黄庭経は則ち怡憚虚無。太師箴は又た従横争折す。蘭亭興業に暨びては、恩逸し神超ゆ。私門の誠誓は、情拘わり志惨む。（第三篇）

心と手が一致すると考えるからこそ、この推測が成立するのである。

姿態を豪端に窮め、情調を紙上に合し、心手を問つることなく、懷を楷則に忘るれば、自ら羲猷に背くも失無く、鍾張に違えども尚お工なるべし。（第六篇）

さらに、心手一致の境地は「天地之心」に基づくと述べ（第四篇）、人為を越えた高みに昇華させている点が『書譜』の特徴であろう。

包世臣の刪定本は、心手一体については殆ど本分の主旨を失

うことなく伝えてゐる。しかし、その論の延長上にある老莊の芸術観については、主たる部分を削除してゐる。

「夫の神を潜めて突に對するも、猶お坐隱の名を標す。志を樂しんで繪を垂るるも、尚お行藏の趣を体す。詎ぞ功は礼樂を宣べ、妙は神仙に擬するに若かんや。猶お挺植の窮り罔く、

工緻と並び運るがごとし。」(第二篇)

福永氏の言を借りれば「書芸術の本質を儒家と道家の哲学によつて根拠づけ、それを『天地の道』と『君子の徳』に結びつけてゐるところ」に孫過庭の立場があるということになる。包世臣の刪定は、孫過庭の道家的立場を曖昧にしてしまつた。

刪定によつて失われたものに、書体は異なつても、根本的な書法は共通するという主張がある。

「詎ぞ心手の会帰は、源を同じくして派を異にするが若く、転用の術は、猶お樹を共にして条を分つごとき者なるを知らんや。」(第二篇)

「草にして真を兼ねざれば、專謹に殆し。真にして草を通ぜざれば、殊に翰札に非なり。」(同)

「(草真) 廻互殊なると雖も、大体は相渉る。故に亦た二篆に傍通し、八分を俯貫し、篇章を包括し、飛白を涵泳す。」

(同)

夫れ運用の方は、己由り出づと雖も、規模の設くる所は、信に目前に属す。「之を一豪に差えば、之を千里に失う。苟しくも其の術を知らば、適に兼ね通ずべし。」(第五篇)

この主張は、王羲之が「兼通」していることを高く評価する精神と通いあうものであるが、包世臣は、前述したようにその箇所も削除してゐる。道光十二年刪本では、二篆八分などに触れた補助的な一文を削除したのみであることから、この刪定には包世臣の意識の変化が表われてゐるといえよう。

道光十二年刪本と二十八年刪定本とを比べると、大幅に削除箇所が増えてゐるのであるが、前者で削除してゐたもののうち、後者で復活してゐる箇所がある。

第三篇で孫過庭は文字の發生に触れ、六書八体といった古い書体については述べないという。包世臣はここを削除してゐる。

「六文の作るは、軒轅自ら肇まる。八体の興るは、嬴正より始まる。其の来るや尚し。厥の用や斯れ弘し。但だ古今同じからず、妍質懸隔す。既に習う所に非ざれば、又た亦た諸を略せり。」

続いて、龍書や蛇書などは物の形をそのまま書いたり、端祥を写したものであるから、絵画に近く、書としては論じないと述べてゐる。

復た龍蛇雲露の流、亀鶴花英の類有り。

「乍ち真を率爾に図き、或いは瑞を当年に写す。」巧 丹青に涉り、工 翰墨に虧く。夫の階式に異なれり。詳かにする所に非ず。

ここは道光十二年本では全文削られてゐたのに、龍書などの書体名とそれを省略する旨の部分が復活してゐるのである。二

十八年本の刪定文を見ると、前文の、昔の評価にとらわれずに現存する書作品そのものを重視するという文から、いきなり「復有龍蛇雲露之流」になるのであるから、唐突の感をぬぐえない。六文八体を省略するという前提があつてこそその「復」である。文字の歴史の上のいわば本流である六書や八体を省略して、末流の龍書などの書体を残すことも不自然である。なぜこの部分だけが復活したのだろうか。臨書したときの書面の美しさを考えて、龍蛇雲露龜鶴といった変化に富んだ文字をここに配したのかもしれない。

第五篇で孫過庭は、王羲之が晩年になるほど優れ、猷之以下がいかに努力しても技術面でも神情の面でも遠く及ばないと述べる。それに続いて、自分の書を自慢する者には進歩はない、卑下するものには可能性がある、学んでうまくならない者もいるが、学ばなければうまくならない、このことは実際にあてはめて考えれば明らかであるという。

「或いは其の作る所を鄙しむ、或いは乃ち其の運する所を矜るもの有り。自ら矜る者、將に性域を窮め、誘進の途を絶たんとす。自ら鄙しむ者、尚お情涯に屈すれども、必ず通ずべきの理有り。嗟乎、蓋し学んで能くせざるもの有り。未だ学ばずして能くする者は有らざるなり。」之を即時に考うれば、

断じて明らかなるべし。

この箇所を道光十二年本では全文削除されているが、二十八年刪定本では最後の八字が復活している。そのため、「王羲之には誰も及ばない」ことが「之を即時に考えれば断じて明らかなるべし」となつて、原文の文脈とは違ったものになっている。刪定後は、現存する王羲之の作品を見れば、その優秀性は明らかである、孫過庭の実証主義と王羲之の顕彰を強調したことになつた。

どのような著述であつても、それは作者の思想と書かれた時代の息吹を伝えるものである。内容的に疑問が多くとも、そのこと自体が時代性を反映することがある。従つて、後人はその疑問点を研究し明らかにするに止るべきであつて、刪定の手を加えるべきではないといえよう。「書譜」の場合、本来『文選』に代表される六朝風の複雑で華麗な文体をまねたもので、その修辭や典拠主義、抽象的な表現は、孫過庭の復古主義にとつて欠かせないものであつたはずである。浮言を排除して本旨を明らかにするといふ名目で行われた包世臣の刪定は、一方で孫過庭の六朝への憧憬と、儒道一体の思想的背景を消滅させてしまつたと言えよう。